

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

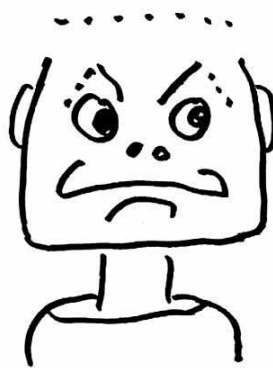
4 APRIL 2007

速報

水戸室内管弦楽団CD発売!
(詳しくは5ページを)

CONTENTS

高橋悠治ピアノ・リサイタル1、2
SELF PORTRAIT 高山三智子3
最近の公演から4
MCO・CD発売+高校生音楽講座の お知らせ&ネタマ5
インフォメーション6



MOZART.
Symphony No.40
in G Minor, K.550
Sinfonia Concertante
in E-flat Major, K. Anh.9(297B)
Mito Chamber
Orchestra
SEIJI OZAWA



写真上・左;高橋悠治(え:柳生弦一郎) 写真上・右;水戸室内管弦楽団・新発売CDの表紙
写真下;映画『アンナ・マグダレーナ・バハの日記』から アンナ・マグダレーナ(クリスティアーネ・ラングが演
じる)が パルティータ 第6番 を弾くシーン(画像提供:ユーロスペース)

それは、勇気の灯をともしピアノ。

4 / 21(土)高橋悠治ピアノ・リサイタル[BACHのための4人 その1.Bravery(勇気)]

「東京に暮らしていて 音楽を語ることはない /
こんなにたくさんの音楽家がいる / 音楽すること
に何の意味があるのか / だれも知らない」 『音
の静寂 静寂の音』(平凡社)から

高橋悠治の書いた文章を、読まれたことはありませんか? もしまだなら、上記『音の静寂 静寂の音』か、『高橋悠治 コレクション1970年代』(平凡社)を、お手にとってみてください。あるいは、そのサイト <http://www.suiguu.com/yuji/> を。引用したものと同様に、痛烈で厳しいことばが、いくつもなっています。しかしそれは、今の世の中にあふれる、他者を一方的に傷つけるようなことばたちとは、無縁のものです。どこまでも誠実に妥協なく音楽と社会について考えてゆく中で、どうしても発しなくてはならないものとして、しかもそれを発することで生ずる責任の重さを全て引き受けていることばたち。それは、難解な、専門的な言い回しを使うことなく、いにしへの詩のようにまっすぐ読み手の心を射抜き、強く揺り動かします。

高橋悠治というひと

4月21日(土)に水戸芸術館でピアノ・リサイタルを行う高橋悠治とは、どんな音楽家なのでしょう? ごく大づかみにその軌跡をたどってみましょう。1960年代に恐るべき天才作曲家・ピアニストとして登場。彼がいかに世界を震撼させたかは、たとえばそのピアノ演奏ひとつをとってみても、彼の師であるギリシャの作曲家・クセナキスの超難曲を鮮やかに弾ききった録音がフランスでディスク大賞を受賞したり、小澤征爾の依頼でパーンスタインの不安の時代のソリストを急遽引

き受け、驚異的な演奏でオーケストラと聴衆を圧倒したり(この話は、新潮文庫の『対談と写真小澤征爾』の中で生き生きと語られています)といったエピソードに明らか。その後、大阪で行われた万国博覧会(1970年)のために、新しいテクノロジーを駆使した作品 慧眼(エゲン)を書くなど話題を集めつつ、70年代の後半には「水牛楽団」を組織してアジアの民衆との連帯をふかめ、その後、画家や詩人との共同作業、日本の伝統楽器やコンピュータを用いた作品の発表などを行いつつ今にいたる。ジャーナリスティックな話題性とは距離を置いているが、その音楽に深く共感する人は世界中にたくさんいる。たとえば、この水戸芸術館に登場した音楽家に関するだけでも、1996年に招聘したニューヨークの重鎮作曲家スティーヴ・ライヒが、日本の現代音楽の現況について私たちに尋ねたときに真っ先に挙げた名前が高橋悠治と高橋アキだったことや、同じ96年に水戸芸術館で岩井俊雄とパフォーマンスを行った坂本龍一に2年後に会ったとき、開口一番「悠治さん水戸に来たんですか」と尋ねられたこと(その前年高橋悠治は水戸芸術館で行われた「日本の実験音楽1960s」の演奏会に出演していました)などが、即座に思い出されます。

しかし、このような話は、あくまで表面的なものです。高橋悠治は、何よりもまず、欧米中心の音楽のかたちや制度を常に疑い、私たちの生きる社会と音楽との関係を真摯に問い続ける、孤独で困難な旅路を続けてきた音楽家です。その思想の精髓は、ぜひ前述の著書でどうぞ。

では、その音楽は? 「代表作」は何でしょう? 答

えは「ない」あるいは「すべて」と言えるかもしれませんが。「同じことは2度とくりかえさない」この音楽家にとって、作品を記念碑のように打ち立てる心持は微塵もなく、それらは、鳴り響いた瞬間、聴く人の心に静かに強く痕跡を残したのち、また立ち去っていきます。幸運にも私たちは数多くのCDで高橋悠治の音楽に触れることができますが、どの時代の音楽も、音楽が生まれてる始原の場所を感じさせる、裸形で、厳しく、それでいてとても豊かなたたずまいをしています。その音楽は、「音楽をするとは、どういうことなのだろう?」と聴く者に終始問いかけながら、誰も聴いたことがないのに、どこか遠い昔に聴いた記憶があるような、そんな不思議なうたをつづやき、なにかを探しています。...やれやれ、私の稚拙な表現ではどうにもなりません。高橋悠治本人のことばこそが、その音楽をこの上なく適確に表現しているように思えます。「できるだけたくさんの音に 耳をひらき / 名づけ分類することなしに / 身体をさらしていると / やがてあらわれてくるだろう / 耳のなかでざわめく神経 高い持続音 / 鼓動のこだま 息の気配も(一行空白)身体をとりまく音も / 生きている経験そのものである音も / 皮膚の境界をこえて / あいまいにゆれうごく ひとつのオーケストラをつくる」(『音の静寂 静寂の音』から) そんな音楽を、聴いてみたいと思いませんか。高橋悠治の70年代までの音楽はたとえば最初ドイツ・グラモフォンから発表された『YUJI PLAYS YUJI』等、90年代以降の音楽は10集からなる『高橋悠治リアルタイム』のシリーズ等で聴くことができ、近年のものは主に「水牛」レーベルから



高山三智子



高橋悠治のアルバムいくつか;左から『YUJI PLAYS YUJI』(タワーレコードPROA - 39)、J.S.バッハ:パルティータ全曲他(コロムビアCOCQ84165~6)、『高橋悠治リアルタイム-8 別れのために』(フォンテックFOCD3451) J.S.バッハ:ゴルトベルク変奏曲(エイベックス・クラシックスAVCL25026) 『記号説 / う・む』(水牛 SG009)

発売されています。余談ですが、高橋悠治の楽曲タイトルは印象深いものが多いです。七つのバラがやぶにさく 慈善病院の白い病室で私がパレスチナの子どもたちのかみさまへの手がみ白鳥が池をすてるように 等々...

高橋悠治のピアノ演奏も、比較を絶したものではありません。すごい技術に支えられているのですが、テクニクや響きで作品を美しく彩るというより、むしろ作品の着衣を引き剥がしていきます。聴き手は強力な覚醒感の中で、いまその曲が作曲されているかのような、同時にその曲について論じられているかのようなスリリングな体験をします。70年代に日本コロムビアに数多く行ったバッハ等の録音、あるいは近年エイベックス・クラシックスから発表している ゴルトベルク変奏曲 や古澤巖との共演に、それは聴くことができます。

リサイタルについて

私たちは今年、『BACHのための4人』と題し、4人の演奏家(高橋悠治、チェンバロ&ハーブの西山まりえ、ヴァイオリンのミリヤム・コンツェン、チェロのマリオ・ブルネロ)にそれぞれバッハをモチーフとした演奏会を行ってまいります。それぞれの視点からのバッハが、「音楽の父」といった権威主義的なイメージでなく、「鏡」となり私たちの音楽に対する知覚や認識にいろんな色彩の光

を当てる、そんなシリーズになるはずですが。

第1回目に登場する高橋悠治は、バッハの作品から パルティータ第6番 を選びました。バロック時代のさまざまな舞曲をあつめた組曲の究極形とも言える6曲のパルティータの、最後を飾るこの曲。その演奏に期待が高まるのももちろんですが、高橋悠治が「パルティータ第6番の“リミックス””と呼ぶ新作 アフロアジア的バッハ がこれに先立ち演奏されるのも注目です。“リミックス”は、ある楽曲をばらばらに解体・再構築する行為ですが(ロックやテクノの領域で頻りに用いられます)最近、高橋悠治の作品にしばしばこの手法が聴かれます。昨年、バリトン・サクソフォンの柘尾克樹との共演リサイタルで初演された影の庭 はマーラーのリミックスでしたし、CD『記号説 / う・む』収録の北園克衛の詩を用いたKitKat Mix はサティがミックスされていました。バッハというヨーロッパ音楽の権化は「アフロ(アフリカ)」「アジア」的視点から、どのようにその姿を変容させるのでしょうか。

リサイタルではもう1曲、ウィーンの作曲家、ヨーゼフ・マティアス・ハウアー(1883~1959)のヘルダーリン(ペーターヴェンと同時代の詩人)の言葉による表題をもつピアノ曲集 が演奏されます。ハウアーはシェーンベルクと違うシステムによる12音技法を開発した作曲家ですが、その音

楽は強固な音の論理で人を縛ることはなく、むしろ夢の断片を現実の中に漂わせ、浸透させていくような不思議な魅力をそなえています。

バッハ、高橋悠治、ハウアー。三者の出会いは、どんな旅に私たちを連れ出すのでしょうか。たしかかなことは、その旅には未知のものを恐れず受け容れる小さなBravery(勇気)があると心強く、そしてそれは旅の終わりにはきっと大きな炎となっているだろう、ということです。最後に高橋悠治がバッハについて書いた一節を引用します。「**バッハの曲のどれかを鍵盤上でためしてみる / 完成したものとではなく / 発見のプロセスとして / 確信に満ちたテンポや なめらかなフレーズを捨てて / バッハにカツラを投げつけられたオルガン弾きのように / たどたく まがりくねって / きみは靴屋にでもなったほうがいい / その通りです マエストロ / そして この音楽と現代社会のかかりについて / さらに 日々の生に その苦しみにこたえる音楽をもたず / 過去の夢に酔うことしかできないこの世界の不幸について / 瞑想してみよ**」(『音の静寂 静寂の音』から)

なお、この企画に関連して4月8日(日)ACM劇場にて映画『アンナ・マグダレーナ・バッハの日記』の上映を行います。こちらについては5ページの「ネットマ」コーナーをどうぞ。《矢澤》

SELF

PORTRAIT

渾身の演奏で聴衆の心を掴む、水戸出身のピアニスト高山三智子による、大作や名作を揃えた意欲的なプログラムによるリサイタルです。

4 / 28(土) 高山三智子 ピアノ・リサイタル

音楽会の素晴らしさとは何だと思いませんか?

それは、時間と空間を越えた色々な作曲家達と、音の言葉によって、自由に心の旅をする事だと思います。その中では、自分でも忘れてしまっていた心の動きや、今まで知らなかった感情が、音の魔術によって呼び起こされたりします。音楽(演奏)が始まった、その瞬間から、すぐに何処か別世界に入ってしまう事もあるでしょう。でも最初は落ち着き悪く、椅子に座って居るのが嫌だと思っている内に、ある時から、自分が自由に飛び回っていて、

音楽が終わったら、また自分が椅子の中に居るのに気が付くということも。音楽は魔術なのです。心の扉に鍵をかけていても、勝手に開かれて、見せたくない自分の秘密も自由に遊び回ってしまいます。怖い。音楽会なんか来たくない。大丈夫よ、どんな事を自由に思っても誰も自分の世界の事で忙しくて、他の人がどんな感情を暴露しているかなんて気にしていません。どうぞ自由に想像の世界で遊んで楽しんで下さい。最初に登場する音の魔術師は、ペーターヴェン 彼の燃える魂、気迫を感じていただければと思います。次なる魔術師はショパン 憂い、過ぎ去った時の情景が音楽に籠められています。最後を締めるスクリャーピンは、全く別世界へ皆様をお連れするでしょう。まだまだ役者はいますが、これらの作曲者の曲は皆様のよく知っている曲なので、その曲によって皆様は自分の物語を思い出すでしょう。あの時、あの人と・・・ネ?絶対に楽しめるから、会場に是非来て下さい。来ないと楽しめませんよ。

でも、もし、目で楽しもうと思ったら、ダメだと思えます。目から入るのも大事だけれど、人に媚びようと、さも一生懸命演奏している振りとか、音楽を感じ入っている振りとかは見る人が見れば、すぐ分かります。人にそんな事で受けようとしなない、正統派の音楽で皆様に音楽の世界を散歩していただき、生きる喜び、エネルギーを注入出来れば私の演奏家としての役目は果たせませす。

今回、芸術館で演奏出来る事をすごく嬉しく思っています。人生って本当に何が起るかわかりません。水戸を去らなければならぬと知った時、一番に寂しく悲しかった事が、「芸術館の舞台に立てない。」と思った事でした。でも運命の神様はちゃんと私に、芸術館で弾ける様にしてくれました。昨年秋に亡くなった母の為に、皆様の心が温かく、柔らかく、自由で華やいだ気分になれる様な演奏をしようと、日夜奮闘しております。

高山三智子

最近の公演から

JANUARY
FEBRUARY



1



2



3



4



5



6



7



8

ニュー・イヤー・コンサート2007(1月5日)
「世界に、いくつもの花。」のタイトルのもと、「花」をテーマにした今年のニュー・イヤー・コンサート。野平多美編曲の「花」にちなむオーケストラ作品が外枠を飾り、天羽明恵の生命の喜びに満ちたソプラノが花を歌いあげ(司会の山本志保とのやりとりに場内爆笑)。専属楽団メンバーをはじめとする演奏者たちの名人芸によって、フレスコバルディから武満徹にいたる音楽の花々が3時間にわたり華麗に咲きわたった。来場された方々の心に届いた幾輪もの花々が、今年一年を美しく彩ることを心からお祈りします。なお、NHK茨城県域デジタル放送で生中継された。曲目詳細は芸術館ホームページ内の担当者ブログ <http://www.arttowermito.or.jp/blog/yazawa/20070105.html> をご覧ください。《矢澤》盛りだくさんのメニューでフルコースの素晴らしい音楽の調べ 余すことなく楽しませていただきました 初春の喜びと希望にかんぱい!!(無記名の方) 天羽さんの歌声がキレイだった・・・(水戸市:A.Y.さん10歳) 今年もこのコンサートに来る事ができて、とても幸いです(新潟県佐渡市:E.B.さん) 花のワルツで幸せで、一年間頑張ろうという気にさせてくれました(水戸市:M.Y.さん) 本当に盛りだくさんの花々。いろんな楽器、声楽によるいろんな名曲。(中略)とにかくぜい沢な、すごいコンサートです(水戸市:M.さん) アナウンサーの進行がよかったです(無記名の方) 楽しみにしていた本日、骨折してあきらめかけていましたが、芸術館の方々のお世話をいただき最後まで楽しむことができました(水戸市:Y.T.さん)

会沢明美ソプラノ・リサイタル(1月13日)
小学校の教諭を務めるかたわら、熱心に歌に取り組み続ける水戸市在住のソプラノ歌手・会沢明美さんが「茨城の演奏家による演奏会企画」のシリーズに登場し、リサイタルを開いた。塚田佳男さん(ピアノ)、堀野浩史さん(バス)という磐石の共演者を得て、会沢さんが近年積極的に取り組んでいる日本歌曲の中から、中田喜直、團伊玖磨、石桁真礼生、三善晃という4人の戦後の作曲家の歌曲が歌われた。「最高の共演者で、地元の皆様に戦後の新しい日本歌曲を紹介したい」という会沢さんの熱意は、そのていねいな言葉さばきとしなやかな歌唱により、しっかりと聴衆の心に届いたようだ。以下アンケートをお読みください。アンケートからあまり日本歌曲に接する機会がなかったのですが、歌詞がとても美しく、メロディーに乗せるとまたステキで、会沢さんの声の質もとても良かったです。昔をなつかしく思い出せる曲(詩)もあり、涙が出ました。(ひたちなか市:無記名の方) 一人の美しい声の小学校の先生が、このような素晴らしいコンサートをなさる。冬の日の午後、その深いまなざしと人生に打たれました。(那珂郡東海村:Y.N.さん) 日本の作曲者により、詩の内

容も感動するもので、多忙な日々のよい安らぎの時となりました。(無記名の方)

茨城音楽文化振興会第5回定期演奏会
アーリー・スプリングコンサート(1月21日)
茨城の若手演奏家が活躍する「茨城音楽文化振興会(IMA)」初めての水戸芸術館でのコンサートは、初春にふさわしいフレッシュな演奏が次々登場。サクソフォンの栗田美奈子さん、フルートの市毛里香さん、ファゴットの倉持香織さんという管楽器の3人がソロに室内楽に妙技を聴かせれば、ピアノは片岡麻衣さん、瀧家尚美さん、川井理香さん、田名部真理恵さんの4人がかわるがわる登場という豪華さ。メゾソプラノの川澄芳英さんがそこに花を添える。ベートーヴェン若き日の佳品や、ブラジルの作曲家ヴィラ・ロボスのファンタジアなど秘曲もまじえたヴァリエティ豊かなステージ。芸術館での演奏会をはじめというお客様も見受けられ、熱心な普及活動を行うIMAの成果が着々と実りつつあることを感じた。今後のIMAのますますの発展をお祈りします。《矢澤》アンケートから 会場もすばらしくバラエティに富んだ構成が楽しめた(日立市:Y.F.さん) サクソフォンやファゴットなど普段耳にしない楽器の音色が聞けて良かった。また、選曲も良いように思う(無記名の方) 曲の簡単な解説があるとよいと思います(水戸市:無記名の方) 若い人の演奏は近くで見ると楽しめますね(水戸市:H.M.さん) とてもすてきな演奏でした!うっとりしました(水戸市M.U.さん12歳)

レイフ・オヴェ・アンズネス
ピアノ・リサイタル(2月4日)
21世紀のピアノ界を背負って立つ若き巨匠レイフ・オヴェ・アンズネスのリサイタル。現在、世界中どこへ行っても大きな注目と期待で迎えられるアンズネスは、しかし、今時めずらしいほどに飾らない、朴とつな人柄だった。その人柄は音楽にもあらわれる。虚飾を廃し、自らの内面に映し出された像だけを切り取ったかのようなその音楽は、類稀な純粋さを湛えていた。ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第32番 の第2楽章、ムソルグスキー 展覧会の絵 のカタコンブなどでの澄み切った弱音による表現は、その最たるものだろう。熱狂的なブラボーに呼応するアンコールは、モンボウ:湖(曲集 風景 の第2曲) リスト:ヴァルス・アンブロンブチュ S.213の2曲。《関根》アンケートから アンズネスを長い間待っていました。待った甲斐がありました。素晴らしい演奏でした。(無記名の方) 多彩なピアノの音色が心に訴えかけてきて、大変幸せな気持ちになれた演奏会でした。特にベートーヴェンは、こんなに名曲だったか!!と今さらながら目からウロコです。(水戸市:無記名の方) キレイで、一つ一つの澄んだ音の連なり、ひびき、本当に素晴らしく、心の洗われるピアノ・リサイタルです。変に力強いだけでなく、一つ一つの音が

最近の公演から

JANUARY
FEBRUARY



1



2



3



4



5



6



7



8

生き生きとしているピアノ演奏、初めてのよう気がします。やはり北欧の清冽さでしょうか。(水戸市:Mさん)

中学生のための音楽鑑賞会

(2月9、15、16日)

水戸市立中学校全16校と茨城大学附属中学校、茨城中学校、水戸英宏中の1年生、およそ2,700人をホールに招いて開催した鑑賞会。出演は水戸室内管弦楽団でも馴染みの工藤重典さん(フルート)と荒 絵理子さん(オーボエ)、伊藤圭さん(クラリネット)、成田有花さんという3人の若手演奏家。工藤さんの中学校時代のエピソードなどのトークを挟みながら、独奏曲からアンサンブル曲まで、全7曲が披露された。そして、演奏会の最後には、出演者全員が伴奏を務めて唱歌 ふるさとを皆で歌った。また、終演後、希望者はエントランスホールでパイプ・オルガンによるバッハの小フーガト短調 BWV578 の演奏を鑑賞した。オルガン演奏は加藤麻衣子(9日)、山田由希子(15、16日)。《中村》中学生のアンケートから 楽器の紹介やライトによる演出もあり、とても楽しい時間を過ごすことができました。木管のアンサンブルのひびきがとてもきれいでした。(第四中) 私は部活でフルートを吹いています。私は今日、工藤さんの演奏を聞いて、キレイな音が出せるようにしようという目標をたてました。(赤塚中) 色々な楽器が一つとなって、とてもきれいな音色を奏でていて、とてもすごかった。また、音楽を聞くことで、気持ちを楽にしたり、元気になったりすることが、あらためて分かった。音楽はとてもすごい力を持っているんだなと思った。(緑岡中) パイプ・オルガンの演奏をはじめて聞いて、すごくきれいな音だなと思いました。とても大きかったなー。(千波中)

ヴェッセリーナ・カサロヴァ

メゾ・ソプラノ・リサイタル(2月14日)

今まさに絶頂期を迎えている世界最高のメゾ・ソプラノの一人、ヴェッセリーナ・カサロヴァが水戸芸術館にやってきた。カサロヴァの歌はもう「すごい」の一言に尽きる。聴衆の期待を余裕で上回る、まさに千両役者のような歌いぶりだった。それにしても、カサロヴァの、豊かでたくましい強声の対のように存在する弱声は、繊細なニュアンスにとんだ表現を秘めているが、それが水戸芸術館コンサートホールATMという室内楽ホールにおいては何にも邪魔されず、明確に客席に届いていたのが嬉しかった。本編10曲につづくアンコールは、モーツァルト:歌劇 フィガロの結婚 から“恋とはどんなものかしら”と、ブルガリア民謡 カリマンク・デンクの2曲。それまでのオペラの世界から一転、カサロヴァの故郷であるブルガリア独特の節回しが印象的な民謡も、感動的だった。《関根》アンケートから 声はもちろん表情、手足の動きなど体全体を使って歌うのに感動。とてもドラマティックで、オ

ペラのシーンのよう。オーケストラ伴奏で聴くより、息のあったピアノ伴奏の方が、間近に彼女に接することが出来、良かったと思う。心豊かになる一時でした。ありがとう。(水戸市:K.H.さん) 素晴らしいかった。本物に出会えた喜びでいっぱいです。オペラの上演も是非聴いてみたい。(水戸市:K.T.さん) 本プログラムも素晴らしいのですが、アンコールも!!再演を希望します。思い出に残るバレンタイン・デーになりました。(つくば市:Y.U.さん)

ちょっとお昼にクラシック6(2月16日)

上記「中学生のための音楽鑑賞会」と同じ出演者、プログラムで、平日の昼間に気軽にお楽しみいただくコンサートとして開催しているのが「ちょっとお昼にクラシック」シリーズ。客席をほとんど埋め尽くすほど、多くの方にご来場いただいた。《中村》アンケートから すばらしい演奏会でした。フルートの工藤さんの黄金の響はいつ聴いてもすばらしいですね。定年退職してお昼のコンサートに出かけられるようになり、とてもよい一日でした。木管アンサンブルの暖かい響につつまれて、心がなごんだ昼時でした。(R.S.さん) 荒さん、伊藤さんはそれぞれコンクールがテレビ放送されたのを見ていたので、生で聞けたのには感激でした。プロのすごさを見せつけられました。(日立市:T.K.さん)

ジグモンド・サットマリー

オルガン・リサイタル(2月26日)

サットマリーさんは、ご夫人とともに、公演の3日前に成田空港に到着し、そのまま水戸入りし、翌日から2日間リハーサルを行った。水戸芸術館のオルガンはエントランスホールに設置されているため、美術ギャラリーなどがオープンしている時間には、音を出すことが出来ない。そこで、オルガンのリハーサルは夜から開始されることになる。サットマリーさんのリハーサルは本当に入念なものであり、連日、深夜まで行われた。ところで、サットマリー夫人は日本の方で、演奏会ではアシスタントも務められた。サットマリーさんがハンガリーから亡命した時から、連れ添い苦労を共にしてきているそう。そして、そのお二人から生まれたのが娘のアニコさん。両親から音楽的素養を受け継ぎ、彼女はヴァイオリニストとして活躍している。今回サットマリーさんは、同郷のコダーイと自身の作品で父娘の共演を行った。サットマリーさんの演奏は、同郷の想い、愛娘への想い、そして生涯をかけて追求する音楽への情熱を籠めて、まさに血の通った、聴く者の心を打つ演奏を聴かせてくれた。アンコールは再び父娘の共演で、マスネのタイスの瞑想曲。《中村》アンケートから オルガンは久しぶりですが、すばらしい演奏でした。(無記名の方) まるでシンセサイザーのようなオルガンが新鮮でした。(無記名の方) 想像以上に創造的で新しく驚きました。(無記名の方)

1.レイフ・オヴェ・アンズネス ピアノ・リサイタル 2.中学生のための音楽鑑賞会 3~4.ヴェッセリーナ・カサロヴァ メゾ・ソプラノ・リサイタル 5~6.ちょっとお昼にクラシック 6 7~8.ジグモンド・サットマリー オルガン・リサイタル

【速報】小澤征爾&水戸室内管弦楽団 CD発売!

小澤征爾と水戸室内管弦楽団が近年取り組んでいるモーツァルト作品のライブ録音が、3月21日にいよいよ発売になりました。「小澤征爾指揮 水戸室内管弦楽団 / 木管協奏曲集」(以来8年ぶりとなる待望のリリースです。ぜひお買い求めいただき、あの感動の名演奏と再会していただければと思います。水戸芸術館内ミュージアム・ショップ コントルポアンでも取り扱っています。

【タイトル】

小澤征爾&水戸室内管弦楽団 モーツァルトシリーズ 1
モーツァルト 交響曲第40番ト短調 / 協奏交響曲変ホ長調(レヴィン復元版)

【品番・価格】

ソニークラシカル SICC10046(CD & SACDのハイブリッド盤)
3045円(税込み) / 2900円(税抜き)]

【収録曲】

モーツァルト:交響曲 第40番ト短調 K.550
モーツァルト:協奏交響曲 変ホ長調 K.Anh.9(297B) / レヴィン復元版)

【演奏者】

水戸室内管弦楽団 小澤征爾(指揮)
工藤重典(フルート独奏) 宮本文昭(オーボエ独奏)
ダーグ・イェンセン(ファゴット独奏)
ラデク・パボラーク(ホルン独奏)

【収録日・会場】

2004年7月7日、8日、9日 水戸芸術館コンサートホールATM
(第58回定期演奏会の演奏をライブ収録)

【速報】来たれ、高校生!

『耳で、考える。高校生音楽講座 in 水戸芸術館』
4月よりスタート。

音楽部門ではこれまで、さまざまな年代の方々のための音楽企画を実施してきましたが、意外にもこれまでなかったのが高校生を対象とした企画。そこで考えました、感性が鋭敏で、好奇心と探究心が旺盛な高校生の皆さんと共に、音楽を「聴く」「知る」「考える」ことを探ってゆく講座シリーズ。芸術館の演奏会企画に関連したテーマによる音楽部門のレクチャーを1回200円という超廉価で聴いていただく、年6回のシリーズです(通して聴く方は1,000円とさらに割引)。出席者は関連する演奏会を学生料金で聴ける特典もあり。全6回の予定は以下の通りです。時間はいずれも17:00 - 19:00、会場は水戸芸術館コンサートホールもしくは水戸芸術館会議場(事前連絡します)。各回定員は30名です。

第1回 4月19日(木)『演奏は楽譜の再現、それとも?』

*4月21日(土)の『高橋悠治ピアノ・リサイタル』をテーマに

第2回 5月31日(木)『指揮者がいること、いないこと、何が違う?』

*6月の『水戸室内管弦楽団第68・69回定期演奏会』をテーマに

第3回 7月26日(木)『クラシック、ロック、ジャズ...音楽の“ジャンル”について考えてみよう』*8月10日(金)の『洪さ知らズオーケストラ』をテーマに

第4回 8月23日(木)『いま世界ではどんな音楽がつけられ、どこに向かおうとしているのか?』*9月14日(金)の『ピエール・ブレーズの肖像』をテーマに

第5回 11月1日(木)『作曲家は書き直す 原典版と改訂版』

*11月の『水戸室内管弦楽団第70回・第71回定期演奏会』をテーマに

第6回 1月17日(木)『モーツァルト、どうしてそんなにすごい?』

*来年1月から始まる『モーツァルト:ピアノ・ソナタ全曲演奏会』をテーマに

お申し込み、お問い合わせは、担当矢澤・中崎までどうぞ(TEL029-227-8118)。受付開始は4月3日(火)。高校生の皆さん、お待ちしております!

【矢澤】



*nettama=ネットワークする猫。タマ。芸術館のコンサートをサカナにいるんなどころへnettamaします。

究極の映画?

4月8日(日)にNPO法人シネマパンチとの共催により水戸芸術館ACM劇場で上映する映画『アンナ・マグダレーナ・バッハの日記』は、究極の映画である。なんて言い方をしたら皆さん、どう思われますか。「すごい視覚効果使ってるの?」「匂いや味もあるのか?」「12時間かかるのか?」はい、全部違います。1967年にドイツのダニエル・ユイレとジャン＝マリー・ストロープという監督が白黒で撮った、1時間35分ほどのバッハの伝記映画です。2番目の奥さん、アンナ・マグダレーナ・バッハの視点から見たバッハの後半生を描くこの映画、奥さんのナレーションとバッハや音楽家たちの演奏シーンが淡々と交替

し進んでいきます。バッハ本人、全編でたぶん5回くらいしかしゃべりません。ワンカットが恐ろしく長くて、『マタイ受難曲』の演奏シーンとか5分以上カメラが動きません。

「そそそそのどこが究極の映画?」はい、このユイレ&ストロープさん、ハリウッド映画にもものすごく批判的なんですね。要するに、あの手この手で人間の想像力を管理し、麻痺させてゆく洗脳装置みたいなものだ。自分たちは逆に、徹底的に余計なものを取り去り画面を「観る」ことに集中してもらおう。言うは易し行なうは難し、大概は最初ついていけなくて眠くなるのですがいつしかこの映画のリズムと波長があってくると「見えて」きます。ナレーションと演奏がつくる絶妙のリズムがいかにそれ自体、音楽で

あるか。ひとつひとつのショットがどれほど完璧な構図で描かれているか。そしてバッハの奥さんのほんのわずかな視線の動きが、どんなに深い愛を感じさせるか。観る人間の想像力をどこまでも引き出してゆく、その意味でこれは「究極の映画」なのだと思えます。ラストにはなぜだか非常に深く感動します。

そうそう、バッハを演ずるのは1996年に水戸芸術館で名演を聴かせてくれたチェンパロとオルガンの巨匠、レオンハルト。その他にも、アーノクールがケーテン侯に扮してヴィオラ・ダガンバを弾いているなど、当時の古楽演奏がたっぷり楽しめるドキュメントでもあります(演奏シーン、ほんとに多いです)。ちなみに日本初公開時(渋谷のユーススペース)には高橋悠治さんがパンフレットに論を書かれていました。「BACHのための4人」プレ企画としてぜひ! 詳しくは6ページ目のインフォメーション欄をどうぞ。

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000

営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸「芸術よもやま話」金曜日18:15頃～15分ほど。水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

茨城放送「田辺昭雄のちよいマジらじお」内「田辺昭雄のなんだっけおじさん～ちよい耳クラシック」毎週金曜日・朝7:20頃から約5分間 水戸周辺1197KHz、土浦周辺1458KHz 4月より時間変更の予定。下インフォメーション欄をご覧ください。

茨城放送「ちよい耳クラシック」4月以降の予定

茨城放送で金曜朝7:20頃から約5分、音楽部門スタッフが登壇して「どこかで聴いたことがあるあの名曲」について語る「ちよい耳クラシック」のコーナー、おかげさまで好評をいただき、多くの方々から「聞いたよ」のお声をいただきます。そんな皆様の声のおかげで、4月以降もこのコーナー、継続の見込みです。日時が動く可能性もありますが、この原稿執筆時点では未定です。今後、学芸員のスタッフブログ (<http://www.arttowermito.or.jp/blog/index.html>) 等でお知らせします。また、3月30日(金)の放送でもお知らせします。

チケット・インフォメーション 3月31日(土)発売分

水戸室内管弦楽団第68回定期演奏会

6月9日(土)18:30開演、6月10日(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000

水戸室内管弦楽団第69回定期演奏会

6月23日(土)18:30開演、6月24日(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥7,000 A席¥5,500 B席¥4,000

第68回と第69回のセット券(限定300セット):S席¥11,000 A席¥8,500

水戸芸術館のみの取り扱いです。

水戸室内管弦楽団定期演奏会には、3月28日(水)より友の会の先行電話予約がありますので、3月31日(土)の一般発売の時点で日付や券種によってはお客様のご希望に添えない場合があります。予めご了承ください。

4月8日(日)発売分

初見宗郷 尺八リサイタル 7月29日(日)15:00開演

料金(全席自由):一般¥3,000 学生(大学生以下)¥1,000

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

映画『アンナ・マグダレーナ・バッハの日記』

4/8(日).....自由席

高橋悠治 ピアノ・リサイタル 4/21(土).....中央、左右・裏

高山三智子 ピアノ・リサイタル 4/28(土).....自由席

西山まりえ チェンバロ・リサイタル

7/14(土).....中央、左右・裏

3/11(日)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な4月のスケジュール

コンサートホールATM

高校生のための音楽講座第1回「演奏は楽譜の再現、それとも？」

4/19(木)17:00～19:00 参加費:1回券¥200 6回通し券¥1,000

[BACHのための4人] その1・Bravery(勇氣)

高橋悠治 ピアノ・リサイタル

4/21(土)18:30開演 料金(全席指定):¥3,500

西山まりえ チェンバロ・リサイタル [7/14(土)]とのセット券¥5,000

高山三智子 ピアノ・リサイタル

4/28(土)18:30開演 料金(全席自由):¥3,500

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート

4/14(土)13:30/15:00 4/15(日)12:00/13:30

4/22(日)12:00/13:30 4/29(日)12:00/13:30

入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

[BACHのための4人]関連企画・特別上映

映画『アンナ・マグダレーナ・バッハの日記』

4/8(日)15:00～16:50(プレトークあり)

料金(全席自由):¥1,000

高橋悠治ピアノ・リサイタル [4/21(土)]もしくは西山まりえチェンバロ・リサイタル [7/14(土)]のチケットと一緒に購入すると¥200引き

野村万作抄15 『隠狸』『六人僧』

4/14(土)18:30開演

料金(全席指定):S席¥4,000 A席¥3,000 B席¥2,000

現代美術センター

「夏への扉 - マイクロポップの時代」展

2/3(土)～5/6(日)9:30～18:00(入場は17:30まで)

休館日:月曜日ただし4/30(月・祝)は開館、翌5/1(火)は休館。

入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600

中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1名は無料

茨城の主な4月の演奏会

有料公演のみ

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521

武蔵野音楽大学同窓会茨城支部 第35回定期演奏会

4/30(月・祝)14:00開演

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7711

音楽シリーズ2007 第17回ひたち出身者によるコンサート

音楽の園 4/8(日)14:00開演

音楽シリーズ2007 合唱コンサート2007 4/15(日)15:00開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

烏力亜娜 桜の物語コンサートpartⅢ 4/8(日)15:00開演

吉川二郎 フラメンコ コンサート 共演:野口久子

4/29(日)15:00開演

ノバホール TEL / 029(852)5881

有馬由希子 ピアノリサイタル 4/7(土)19:00開演

熊倉千佳子 ピアノリサイタル 4/8(日)14:30開演

龍ヶ崎市民会館 TEL / 0297(64)1411

Friendship Concert～新しき風に浪漫を乗せて～

千住真理子(ヴァイオリン) 4/7(土)18:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] 2007年4月発行 第124号

編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃

矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...MCO、時代も山脈も超える。